

リサイクル農業で契約栽培の規模拡大

●シェフも惚れ込む杉本さんの野菜づくり

平成8年に日本石灰窒素工業会は『農家の石灰窒素使用体験記』を公募した。静岡県三島市の杉本正博さんは、「多彩な有機物を駆使した土づくり」という体験を発表し、これが優秀賞に輝いた。

土を根本的に改善する方法として、まず深耕し、堆肥(牛ふん、豚ふん)、廃棄配合飼料、米ぬか、苦土リン、石灰窒素を全面散布して耕うし、圃場でよく腐熟させて土づくりをおこなった。そして、こまつな、ほうれんそう、種しょうがなどを栽培した。その結果、契約しているスーパーや消費者から、荷姿、色、日持ちがよく価格も有利に販売できたと好評だった。

それから8年経ったが、杉本さんは現在も石灰窒素を土づくりに使用しておられるとのこと。その後の状況をお聞きすべく三島市に杉本さんを訪問した。

大手スーパーの目に止まり契約栽培

4月の中旬、こまつなを栽培しているパイプハウスで、収穫作業に忙しい杉本さんは、「これからの農業は、消費者の信頼なしには発展はない」との信念から、消費者への情報公開、堆肥による土づくり、化学合成農薬の削減に取り組んでいる旨を話された。そして、この活動を仲間を募って地域に根づかせ、普及を図っているとのことだった。

杉本さんの農業経営は、8年前に比べて大きく規模拡大されていた。こまつなの栽培面積は延べ3.5ha、ほうれんそうが60aで、天候に左右されず、安定出荷ができるように平成10年から、一部にパイプハウスを導入し、現在23aにおよんでいる。パイプハウスでは、こまつなを周年で年7作、ほうれんそうを晩秋から早春まで露地で1作栽培している。

このようにして収穫した野菜は、鮮度を保つために収穫・結束するとすぐ夫人が家に運び、洗浄して予冷庫に貯蔵する。そして、冷蔵車で20数店舗を持つ地元大手スーパーに運ぶ。この冷蔵車には『杉正のこまつ菜』と大きく明記してある。個人の農家としてはとても珍しい。そうした努力によって、店に並べられたこまつなは、みずみずしくておいしいと評価されている。

このスーパーは、生鮮野菜のレベルを上げるために、目玉となる商品を探していたところ、杉本さんの野菜が目にとまったのだそうだ。

平成5年からは、ほうれんそうの契約栽培が開始され、翌夏からは、周年出荷が可能なこまつなも栽培に組み入れられた。

★「第9回全国環境保全型農業推進コンクール」で優秀賞を受賞した杉本さんご夫妻



有機物＋石灰窒素で「すごい力」を発揮

さて、杉本さんの野菜づくりは「土づくり」が基本である。堆肥をはじめとする有機質資材の施用とよく耕すこと。堆肥は、年1回ほうれんそうの前に、豚ふんおがくず堆肥を10a当たり4t施用している。肥料は有機質肥料を主体に施用し、毎作米ぬかを10a当たり180kg、100%有機質肥料を基肥に100kg施用している。米ぬかを使用する際には、石灰窒素を露地では毎年、ハウスでは1作おきに施用して混和し、夏は2週間ほど、冬は3～4週間十分腐熟させてから種まきをおこなっている。石灰分の補給には土の軟らかさを保つため、卵の殻を100kg

施用している。

杉本さんは、「石灰窒素は有機物と一緒に施用するとすごい力を発揮する。緑色が濃くなり、肉の厚い葉菜になるのは石灰窒素のおかげです」と話される。

また、夏場にはハウスの連作障害対策に簡易な『太陽熱・石灰窒素法』をおこなっている。そのおかげで土壌殺菌剤は一切使っていない。

相づく資格認定と栄えある受賞

平成4年には、杉本さんら若手の農業者が中心となって、「土づくり、人づくり、仲間づくり」をスローガンに地区の農業者18人で山田宮農研究会を設立した。杉本さんは事務局長として、創設以来毎月1回心はず開く研修会の企画を立て、会員のなかの中堅リーダーだ。こうした業績が目され、平成13年に静岡県農業経営士に、平成15年にエコファーマー(こまつな、ほうれんそう)に認定されている。さらに、今年3月17日には「第9回全国環境保全型農業推進コンクール」で栄えある優秀賞を受賞した。

顔の見える関係づくりに見学・体験

最近、イタリアンレストランのシェフが杉本さんの野菜に惚れ込み、「三島産の野菜がなければ、僕の料理は始まりません」という談話がある女性誌に掲載されていた。

★パイプハウスでは、こまつなを周年で年7作栽培している



が、自力で生活できるように、環境にやさしくつくられた安心・安全な野菜の宅急便をぜひ実現したい。」

この夢が1日も早く実現することを祈りつつ新緑の美しい三島を後にした。

【日本石灰窒素工業会・平澤陽一】

また、平成13年から、こまつな、ほうれんそうを地元の小学校と中学校などに給食用の食材として供給を始めた。さらに消費者との交流、食農教育にも力を入れているので、杉本さんの圃場には、地元の消費者だけでなく見学者も多く訪れている。

最後に杉本さんは今後の抱負をつぎのように語ってくださった。

「安全・新鮮・おいしさをモットーに、消費者と生産者の顔の見える関係づくりのために、スーパーと連携し、お客さまを対象にこまつなの圃場見学や収穫体験を開催したい。パイプハウス50aを目標に規模拡大を図り、スーパーが堆肥化した生ゴミを使って、こまつなの面積を拡大することによって、リサイクル農業の展開をさらにすすめたい。養護学校に通っている娘